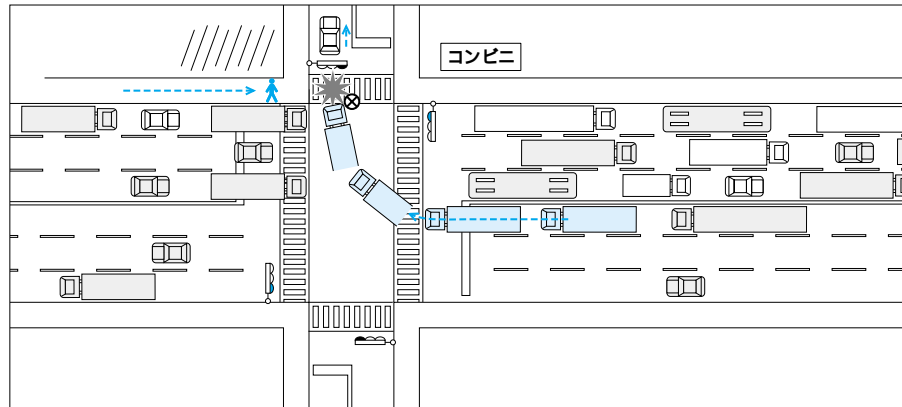


職場における交通安全指導

Part 65

事故事例に学ぶ
32

右折の際、横断歩行者と衝突



事故の概要

発生状況

日 時：平成18年5月某日 午後6時頃
天 候：雨

道路状況

交通頻繁な市街地の片側三車線道路の交差点

事故の当事者

運転者A(4tトラック): 61才、男性
被害者B(歩行者): 16才、男子高校生

被害状況

A: 前部バンパー左側擦過痕
B: 右鎖骨骨折、全身打撲(全治2か月)

事故状況

トラック運転歴25年のベテランドライバーAは、入社直後に軽微な人身事故を1件起こしたのちは長年に渡り無事故を重ね、社内でも信頼の厚い模範運転者で、近年は後輩の指導にも当たっていた。

事故当日は、会社を午前5時に出発、途中で鋼材や金属加工品を積み込み、県内3箇所を降ろし、近くの会社に帰るところであった。

午後6時頃、交通頻繁な片側三車線道路の右側車線を走行、直前の交差点を右折するため「青」信号に従い、徐行しながら交差点内に入った。

その頃周辺一帯にはやや強い雨が降っており、対向車線の交通が頻繁であったことも影響し、通行車両は全般的に低速で連続進行の状態であった。

Aが前方の乗用車と共に右折待機中、対向車線を走行中の車両は、進路前方が停滞している状況であり、右折の合図を出し交差点内で停止中のA

等を認め、その右折が容易にできるようそれぞれ交差点の手前で停止した。

それを見た前方の乗用車は右折を開始し、交差点およびその先の横断歩道を通過した。

Aは先行の乗用車がスムーズに右折を終えたのを見て、一瞬間を置いて乗用車に続き右折を始めたが、その時には信号が「黄」から「赤」に変わる寸前の状態であった。早く交差点を通過しようと幾分速度を速め横断歩道の手前に差し掛かった際、一瞬左右の歩道に眼を転じ安全を確かめたところ、歩道通行者の姿が見当たらなかったことから、そのままの速度で横断歩道を通過しようとした。

ところが、対向車線で停止中の大型トラックの陰になった歩道から、いきなり雨に濡れたBが現れ横断歩道に駆け込んできたため、これを至近距離で発見したAは慌ててブレーキを踏んだが間に合わず、自車の前部バンパーで横断中のBを撥ね飛ばし、Bに重傷を負わせたものである。

この事故を振り返ると、直接の原因はAが交差点を右折する際に十分徐行しなかったことと、横断歩行者の安全確認が不徹底であったことである。

しかし、その背景には事故を惹起させるに至った幾つかの要因が潜んでいる。

まず1つには、薄暮時間帯であり、しかも雨交じりで周辺一帯は薄霧がかかったような状態で運転視界が十分でなかったのに、Aはまだ運転に支障はないと判断し、ライトを点灯しないで走行したことが事故に間接的に影響を与えた。

2つには、対向車線の車両が交差点手前で停止し右折に配慮してくれた、そんな中で前方の乗用車がスムーズに右折を終えたことが本人に油断を

生じさせ、周囲への危険意識を低下させた。

3つには、十分に徐行し対向車線の停止車両間の「死角」や歩道等を用心深くチェックし走行すべきであったが、右折中に信号が「黄」から「赤」に変わる状態であったことから気持ちに焦りが出て、一刻も早く交差点を抜けようと速度を速め進行した。

4つには、横断歩道の直前を走行中、対向車線の歩行者用信号は既に「赤」に切り替わっていたことから、横断歩道を渡る人はないと判断し漫然と走行した。

Aについては、以上の一連の運転行動が事故に結び付いたと考えられる。

一方Bについては、歩道を通行中、事故の直前に降り出した雨により、信号先のコンビニで一時雨宿りをしようと、赤信号を無視し、脇目も触れずに一目散に横断歩道を渡っており、無謀な横断、注意を怠った点等責められるべき行動が大いにあった。

安全指導

適切な体調管理

安全運転で最も重要なことは、常に体調をベストに保つことと考えます。

トラックドライバーは、安全確保のため運転中は相当に神経を使い、また、時にハードに体力を使うことが求められます。

Aの場合、前日は休日でしたが、夜床に着いたのは11時半を回っていました。

事故当日は、重い荷物の積み降ろしや長い運転時間からみて、相当に疲労が溜まっていたようです。

また、普段視力の衰えを感じていたことを察すると、体の疲労や睡眠不足が事故に少なからず影響を与えたと考えられます。

ベテランになれば、年を重ねる毎に運動能力や判断能力が低下してきます。

適切な体調の維持・管理を怠らないようにしましょう。

信号変わり目・横断歩行者に注意

昨年の交通事故による死亡者を態様別に見ると、歩行者が約31%、自転車が約13%であり、両方を合わせると自動車乗車中の死者を上回っています。最近、歩行者・自転車等いわゆる「交通弱者」が被害者になる事故が多発しています。

これらの事故は、その多くが交差点を横断中に発生しており、その中にはBのように信号の変わり目に事故に遭うケースが少なくありません。若者による無謀な横断にも警戒が必要ですが、とりわけ高齢者の場合は、他の年齢層に比較し圧倒的に横断歩行者中の事故が多いため要注意です。

信号や交通ルールに疎い高齢者が、信号を無視して横断し事故に遭うケースが多々あります。

信号の変わり目には最大限の注意と、併せて「交通弱者」を保護し・優先させる「思いやり」のある運転を心掛けましょう。

長い無事故歴・気の緩みに注意

死亡事故を起こしたドライバーの約75%は、「無事故歴」のドライバーというデータがあります。

しかし、無事故歴が長いということは、一方で「自分は事故を起こさない」という過信にもつながり、その意識は年を追う毎に強まるといわれています。

Aが事故を起こした当時の状況は、交通頻繁で見通しの悪い薄暮時間帯であり、しかも雨の降り始めという事故発生の危険性が高い条件下でした。

従って、注意深い慎重な運転が不可欠でしたが、無事故歴の自信に加え、帰社間近なホッとした油断が、注意力を弛緩させる結果となりました。

ベテランドライバーといえども、事故に遭遇する危険は他のドライバーと同じであることを自覚し、無事故歴は「危険の兆し」と心得て油断を戒めましょう。

交差点の右左折・重大事故多発

交差点やその付近では、歩行者、自転車、二輪車等いわゆる「交通弱者」が被害者になる重大事故が多発しています。

特に、交差点を右左折する際は、事故発生の危険性が高いことから、徐行が義務付けられており、まず、どんな危険も回避できるように、十分な徐行を徹底することが必要です。

Aの場合、右折の途中で対向車線の信号が赤に変わる寸前であったことから、焦って徐行を怠り、また、乗用車のスムーズな右折を見て安易に速度を増し、横断歩道を漫然と通過しようとしてBを撥ねてしまいました。

「交通弱者」の様々な危険要素である、

- ・建物・車両等「死角」部分から飛び出す二輪車
- ・夜間、反射材を着用しない歩行者・自転車
- ・前照灯に照らされない暗がりの歩行者・自転車
- ・雨天時、周囲への警戒感が薄い傘指し歩行者・自転車
- ・横断歩道等に飛び出す歩行者・自転車

等の発見遅れや見落とし、判断ミス等をなくすためには、交差点を右左折する際、十分に徐行(状況により一時停止)し、また、薄暮時の早め点灯を励行し、前方注視を怠らないことが肝要です。